

提出日：平成 24 年 1 月 19 日

反すうに対する肯定的信念が反すうを通じて不安、抑うつに及ぼす影響

The effects of positive beliefs about rumination on decreasing anxiety and depression.

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻

1000-100709 甚五和也

指導教員 小澤真教授

1. 問題と目的

現代社会において、抑うつはメンタルヘルスに影響を与える重要な問題の一つである。抑うつに影響する心理的要因として、ネガティブ反すう(以降、反すうとする)が考えられており、様々な研究により、反すうと抑うつとの間に正の相関が見られたとしている。また、反すうは抑うつだけではなく、不安など抑うつ以外の様々な不適応的な感情との関連も指摘されている。

この反すうを引き起こす要因として考えられているものとしてメタ認知的信念、反すうに対する肯定的信念(以降、肯定的信念とする)と反すうに対する否定的信念(以降、否定的信念とする)が考えられている。2 つの要因ともに反すうと関連していることが指摘されているが、特に肯定的信念に関して様々な研究がなされている。

Wells(2000)が提唱した S-REF モデルでは、肯定的信念を強く有しているほど、反すうを行いやすく、その結果として不安、抑うつに影響を与えていると考える。

しかし、これまでの研究では、肯定的信念と反すう、不安、及び抑うつとの間に直線的回帰を想定しているが、曲線回帰を想定して肯定的信念の確信度の違いが反すう、不安及び抑うつについて与える影響を検討した研究は比較的少ないと考えられる。また、これまでの研究では肯定的信念に関する因子構造の検討が十分に行われていないと考えられるため、予備調査にて肯定的信念の確信度を測定する尺度を作成する。続いて、その尺度を用いて、曲線回帰を想定して肯定的信念の確信度の違いが反すう、不安及び抑うつに影響を及ぼすかどうかを検討することを目的とした。

2. 予備調査

1. 目的

肯定的信念を測定する尺度を作成することを目的とした。

2. 調査方法

2011 年 6 月に首都圏の私立大学に在籍する大学院生を対象に無記名式の自由記述式の質問紙調査を実施した。その結果、得られた 42 項目に先行研究から考えられる 8 項目を加えた計 50 項目について、2011 年 7 年に首都圏に在籍している大学生を対象に無記名式の質問紙調査を実施し、165 名の回答を得た(有効回答率=93.75%)。

3. 質問紙の構成

- (1) 自由記述式の質問紙調査の結果、得られた 50 項目
- (2) 抑うつ反すうに関するポジティブな信念尺度(PBDRQ ; 長谷川・金築・根建,2009)
- (3) 反すうに対する肯定的信念尺度(PBRQ ; 高野・丹野,2010)

4. 結果と考察

最尤法プロマックス回転による因子分析の結果、2 因子が抽出され、本尺度を PBRQ とした。各因子の項目内容から、1 因子目を反すうをすることの利益に関する信念(以降、利益に関する信念とする)と命名し、2 因子目を反すうをすることの不利益に関する信念(以降、不利益に関する信念得点とする)と命名した。基準関連妥当性の検討の結果、利益に関する信念に関しては他の尺度との間に十分な相関が見られ、肯定的信念の内容を反映していると考えられた。不利益に関する信念に関してはほとんど他の尺度との間に有意な相関は見られなかったが、項目内容から Papageorinou & Wells(2001,2003)が指摘している否定的信念の内容に近い内容を測定していると考えられた。信頼性についても検討したところ、各因子ともに十分な内的整合性を示した。

3. 本調査

1. 調査方法

2011 年 10 月に首都圏の私立大学に在籍する大学生・大学院生を対象に無記名式の質問紙調査を実施し、191 名の回答を得た(有効回答率=91.36%)。

2. 質問紙の構成

- (1) PBRQ 尺度(予備調査にて作成)
- (2) ネガティブな反すう尺度(伊藤・上里,2001)

(3) 日本語版 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY 尺度(岸本・寺崎,1986)

(4) Self-Rating Depression Scale 日本語版(福田・小林,1973)

3. 仮説

(1) 反すう傾向が高い人は不安・抑うつが高い

(2) 肯定的信念もしくは否定的信念が低い人は反すう傾向が高く、肯定的信念もしくは否定的信念が高い人も反すう傾向が高くなる。また肯定的信念もしくは否定的信念が中程度の人は反すう傾向も低い

(3) 肯定的信念もしくは否定的信念が低い人は不安、抑うつが高くなり、肯定的信念もしくは否定的信念が高い人も不安、抑うつが高くなる。肯定的信念もしくは否定的信念が中程度の人は不安、抑うつも低くなる

4. 結果と考察

各仮説を検討するために、相関係数を算出し、各変数間の関連性を検討した。その結果、男性において仮説は支持されず、各変数間について想定していた関係性は認められなかった。一方で、女性においては仮説が部分的に支持され、反すうと不安、抑うつ間に関して想定していた関係性は認められたものの、各信念と反すう及び不安、抑うつ間に関して想定していた関係性は認められなかった。続いて、パス解析を実施したところ、男性においては十分な適合度を得られたモデルは採択されなかったものの、女性においては否定的信念が反すうを通じて不安、抑うつへとつながるモデルが採択された。このことは女性に関して言えば、Wells(2000)が考えている S-REF モデルを部分的に支持する結果となり、Wells(2005)が提唱したメタ認知療法の理論的裏づけを支持する結果となった。今後は各信念に関して言えば、文化差による影響や各信念の内容による影響について検討し、反すうに関して言えば、性差による影響を検討すること、加えて、本研究から得られた知見について実証研究を行うことによって因果関係を検討することが必要だと考えられる。